第30号（2023年夏号）
発行日　2023年9月21日
信州大学教職支援センター
Shinshu University
Center for the Teaching Profession

教職支援センター　ニューズレター

巻頭言　【「特徴」と「特色」のはざま　】

長野県教育委員会の依頼を受けて、「特色ある県立高校づくり懇談会」に参画する機会を得た。席上、3点にわたる問題意識や論点を述べた。

第1は、高校生の位置付けに関して。長野県で学習者主体の「学びの県づくり」を推進していくならば、これまで教育の対象であった高校生をどのように位置づけていくかがポイントになる。昨今、社会の責任を次の世代に担わせていくといった「社会の担い手論」が無自覚に展開されているきらいがあるが、今後は、高校生をこれからの社会を共に創造していく主体や協働的なパートナーとして明確に位置付け、高校生の育ちと学びのための支援のあり方を具体的に考えていく必要があると思われる。「社会の担い手論」に対する「社会の創り手論」の観点である。高校生を位置付け直すと、彼ら彼女らは、単なる教育の対象である客体から、学びの主人公としての主体となり得るのであり、高校生の学びのあり方を刷新していく必要があるだろう。

第2は、高校教育の特色・魅力化の方向性に関して。学校の「特色」を出すために尽力する中心的主体は学校であるが、その学びが「魅力」的かどうかは「学びの当事者」のフィルターを通じて判断される。学校現場の僅少なリソースに対して「自前主義」の限界が露呈しつつある中、学びの「需要者」と「供給者」といった2者関係の捉えではなく、共に学びを創造していくパートナーとして地域住民も位置付けていくようなマインドセットが重要となろう。その1に、現在の高校が備えている「特徴」を今後より一層磨きをかけて「特色」としていくならば、その特徴の「内容」とその特徴を伝えていくための「方法」に関する検討が不可欠となる。また、特色を「伝える」ことを「仕組み化」していく際に、現在の人的リソース（教職員スタッフ）では不十分であるならば、そこは教育行政がしっかりと予算計上し、教職員スタッフ以外の専門人材の活用、具体的には、コーディネーター人材等の設置・育成等の検討が必要となろう。その2に、他方、現在の高校には「特色」がないという厳しい評価が下されるならば、時間割、単位、学び方、学習環境、カリキュラム、人事、入試など、文字通り、抜本的改革が必要となる。

第3は、行政の役割に関して。今後、学習者の学習環境を整えていく場合、①他県都の比較においてアドバンテージがある「自然的環境」、②学習文化や学校風土を規定する環境整備と関わる「文化的環境」、③勤務状況、身分待遇の改善を含む教育関係者のエンパワーメントと関わる「人間的環境」等の論点があり得るが、条件整備の責務を有する教育行政と首長部局の覚悟が改めて問われている。

最後に、多様な選択肢を増やした後の課題に関して。多様な選択肢の必要性が様々なところで提起されているが、選択肢を「増やす」ことと「選択できる」ことは別の話である。選択肢を多様化していくならば、実質的に多くの人が選択できるよう環境を整えていく必要がある。教育振興基本計画で使われている「ウェルビーイング」や「一人の子どもも取り残されない」というフレーズの実質化が問われている。

後期中等教育としての高校が果たす役割とは何かを問い直しながら、尽力したい。

荒井　英治郎（教職支援センター　准教授）

教職支援センター

シリーズ　活躍する卒業生

多くの卒業生が教育現場で活躍しています。このコーナーでは、毎回テーマを決めて、卒業生の活躍を紹介します。

～ ミドルリーダー編～

長野県木曽町立日義中学校　教諭

宮澤 初実　先生

繊維学部応用生物学系　　平成14年度卒業

教育実習を通して再確認できたこと・・・

信州大学を卒業し、長野県で教員として働き始めて今年で９年目となりました。その間、悩んだり、落ち込んだりする日々もありましたが、その時々に出会った同僚の先生方、また、子どもたちに支えられて今日まで何とか元気に過ごしています。９年という年月に見合うだけの力が自分についていればいいなと願うばかりです。

そんな折に、教育実習生の指導のお話をいただきました。自分に務まるのかと不安に感じましたが、かつての自分と同じように信州大学で学ぶ学生さんと知り、これも何かの縁、私にとっても貴重な経験になるはずだと自分自身を励ましながら担当させていただきました。

その結果、手探り状態での指導になってしまったように思いますが、実習生の姿から学ばせていただいたことが非常に多くありました。

中でも、最も私が心に留めておきたいと思ったのは、生徒の目線になって考える教材研究の大切さです。実習中、何度か実習生と授業の教材研究を兼ねた予備実験に取り組みました。その中で、実験方法や注意点の他に「この実験の様子は生徒にはどう見えるのか。自分は納得がいくが、生徒はどう捉えるのか。」という意の質問を受け、ドキリとしたことを覚えています。

はて、毎年やっていたこの実験で、生徒はどんな問いをもっていただろうか、どんな考察を導き出していただろうか。考えてみれば、その視点こそ教材研究の段階で最も大切にすべきことであるように思うのですが、いつの間にか経験だけに頼り、生徒の目線になって考えることが希薄になっていたことに気が付きました。大変恥ずかしかったのですが、今回教えてもらえて良かったと思い直し、現在の授業づくりに取り組んでいます。

数年前から突如頻繁に使われるようになった「ソーシャルディスタンス」という言葉に負けじと、その瞬間だけは頭を寄せ合って、共に実験を見つめる実習生と生徒の姿に、自分の姿もこうあり続けたいと思いました。自身の教員としてのあり方を再確認できたこと、非常にありがたく思っています。ありがとうございました。

教職関連ニュース

○ 令和6年度から教員採用試験が前倒し 大学3年の受験も可能に !!

令和５年５月３１日、文部科学省から、公立学校の教員採用選考試験の早期化と複数回実施などについて方向性が示されました。令和６年度は、６月１６日を一つの目安として、例年よりも１～２ヶ月程度、試験実施日が早くなる見込みです。さらに、試験を１年に数回実施することも検討されており，条件によっては大学３年生も教員採用試験を受験できるように調整が進められています。教採を受ける学生は、今後の動向に注目です。
※東京都などでは、大学3年生受験が実施され、本学の学生もチャレンジしています。

○ 令和6年4月1日から、合理的配慮の提供が義務化されます

合理的配慮とは、国・都道府県・市町村などの役所や、会社やお店などの事業者に対して、障害のある人から、社会のなかにあるバリアを取り除くために何らかの対応を求める意志が伝えられたときに、負担が重すぎない範囲で対応することです。

平成２８年４月１日から、国や自治体では先駆けて法的に義務化されているため、国公立の学校に勤めている教員の先生方はすでに提供を経験されていると思います。令和６年４月１日から民間事業者も義務化されたことで、障害のある・なしに関わらず、すべての人の尊厳が守られる共生社会の実現にむけて、大きな転換点と言えるでしょう。新しい世代を育てる教員として、関心の深い話題ではないでしょうか。

教職支援センター5～8月の動き

○松本市教育委員会訪問(5/11) ○朝日村未来塾開講式(5/13) ○生坂村未来塾開講式(5/20)
○山形村未来塾開講式、小川村未来塾開講式(5/27) ○第４回教職教育部会（5/29）
○長野県総合教育センターとの連絡協議会（5/31） ○ＣＳＴ養成プログラム実施委員会(6/5)
○CST養成プログラムワーキング(6/19) ○第１回教職支援センター運営委員会 (6/20)
○筑北村未来塾開講式(7/8) ○学芸員養成課程実施分科会(7/21)
○教職事務担当者勉強会（8/24） ○各学部との連絡会（8/28～8/30）

地域連携パートナーからのメッセージ

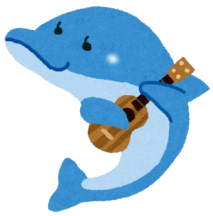
筑北未来塾

筑北村教育委員会事務局
生涯学習係 浜辺篤伸 先生

令和4年度から始めた筑北未来塾は今年度で2年目を迎えます。村内の中学生を対象とした自主学習型の塾で、7月の初旬から始め、1月下旬まで約半年間コミュニティ・スクールの一環で本事業を展開しています。受験を控える中学3年生や日頃の宿題や長期休みの課題などに取り組む1年生、2年生の学習の場の提供を目的としております。

今年度は昨年度より、参加生徒数も増え、信州大学の学生さん6名の方にご協力いただいております。中には、筑北村出身の学生さんも参加してくださり、これが地域で子供を育てるということなのかなと感じました。昨年度実施した際、閉校式の時に大学生との交流の時間を設けた際中学生から「もっと早くから大学生と仲良くなりたかった」という声があったため、今年度は第1回の開校式の際に大学生全員に自己紹介スライドを作成していただき、交流の時間を設けました。大学生と中学生の共通の趣味、部活動など、話すきっかけづくりになればいいなと思います。はじめは緊張から話しかけにくさがあるかと思いますが、交流の時間を経て、年齢の近い大学生と親しみやすい存在になればと思います。

現在は、中学校の教員の方にも参加していただき、中学生の指導を行っていただいておりますが、やはり普段慣れ親しんでいることもあり中学生が質問をする際は、教員の方がメインとなっています。今後は、教員の人数は最小限として、学生の皆様や地域の方々を主体として本事業を実施し、企画の立案もお願いしていければなと考えております。それには学生の皆様の協力が不可欠となり、参加しやすい日程や時間帯、環境をよりよいものに整備していきたいと思います。また例年大学1年生の方々にご協力いただいておりますが、2年目以降も継続してご協力いただけるように働きかけていきたいと思います。今後とも信州大学学生の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。



編集後記

今年の夏は災害級の猛暑と呼ばれるほど暑い日が続いたり、新型コロナウイルスが改めて流行するなど、心身ともに疲労やストレスが溜まりやすい状況でした。しかし、そんな苦境にも負けず、学生たちは大学・教育現場でしっかりと経験を積んでいきました。困難に負けず、充実した学びを継続できるように、今後も教員として精一杯支援したいと思います。（広報担当 横嶋敬行）

信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 教職支援センター

■〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1 ■TEL: 0263-37-3367 ■MAIL: kyousho@shinshu-u.ac.jp
■URL: https://kyoushoku.shinshu-u.ac.jp/kyoushoku/cms/